

# 理研会報

発行所 理科研究部 事務局  
 50校 50校 50校  
 成田市 成田市 成田市

## 昔日を語る

熊 寿

思い出をなつかしんで書きとる。思い出になると、なにかいまいまいが知れる。それが証拠に、昔を生き返らせたといふは、一様に「昔はよかった」といふ。現代の弊流に乗りきれない体力の衰えと感嘆のずれが、「思い出の国」に思いを馳せ、めづりながら思い出すが、私もあの頃のなつかしい喜びを忘れることができない。

あの頃、それは昭和三十年から三十二年にかけて、三里塚小学校が千葉理科教育研究会、ならびに専攻委員の理科研究指定校をおおせつかった時代である。当時の校長は亡くなった日善浩之助先生、教頭が私、主任が小倉武男先生、そして副校長として当時のついで、今でも銘々たる田崎、平山、板橋、飯田、森等の諸先生、加之て主任指導主任が御園勇先生。

とにわかれ、二日間酒だけはよく飲んだことを記憶している。今日のような交通事故といふことば、之をいふ時期、もとも、御園先生がバイクというやっへ乗って来たから、みんな珍らしがって、何かがあって話題にした時代だから、何の心配もなく帰った。終つては乗りおけると旅館へ泊り込んで、

「今日もさう思ひがた、指導委員の書き方から指導してくれな。そして満足するまで書き直しをさせ、つききりで、夜の七時でも八時でも双方で頑張った。実験の工夫にしても委員みずからこれに取組んで研究をした。夜更けて「これでよし」といふ段階に到るまでくる。

御園先生もさびしかった、決して中途半端な妥協は許さぬ人であった。「研究とはそんな生々しいものである」「これが先生の口ぐせであった。十数年経ても忘れられない先生のこのことばが、私が今の研究学校のあり方を批判する考え方の基礎になっている。追及し、時には御園先生、政行方富太郎先生を曲んでドウランをぶつけて三里塚の山野を跋渉する。朝の校舎の中でブドウホオスキの群落を見つけたのもこの時、植物の大家二人とも、さすがにこの植物の名が解らず、あちこちに照会されてやっと帰化植物のブドウホオスキであることとまよとめてくださった。群生は空港建設を断つたので、今は、だが、当時、先生の家の庭に繁っている、貴重な記念品である。

この研究学校をやったおかげで、教員と生徒との眼が研されたことは、懐かしかった。小さなことにも眼をみはり、驚きを感ぜ、疑問を抱

## 海外教育事情視察と理科教育の現状

研究部長 板橋 三枝 氏

フジントンは異動の後生々しい黒人術へバスを乗り入れる。学校にも行かないのである。子供供がどどと通り、日中から歩道に二層の建っている沢山の山の人、そうかと思つてすばらしい車が家の前に何台も停めてある。何時銃弾が飛んでくるかわがらぬと驚かされ、続いて「ロビー」へ、いるわいる。数知れず、不思議な世界だ。写真をとれば金をねだられる。何することなくたむろしているもの、ギターを手にした者、〇〇新聞を売りにける者、全く様々である。ハワイトハウスのある中心街の一角にはこのような問屋ががががががががである。ポトマックのほとりには何もな何代かの校が湖畔を埋めつくしていた。日本を離れて一ヶ月近くなる者には何か心の安らぎを感じさせてくれた。

サンフランシスコは坂のまち、ま、やがてそれを説明しようとする。なとをば、当時の配給外米の中にまじって大きな根種のよるな種を丹念に栽培して花を咲かせ、それがルコオンウであることをつづらとめ、小さいしやほん玉をつくるのに、指導書や指導課でなした手引書によつては、どうしてもうまくなるので、徹底的に実験を重ねて、苛性カリの量一わずかが〇・三グラムの差一に原因することを知り、指導書を修正させた。なとをば、板橋を視察しては、あつても

今日果してこんなことをやるといわれるのである。この研究会の授業を見ても指導技術の向上だけに眼を向けている感が深い。毎日に増大する新しい知識、これを一切受入れることは不可能だ。教材の精選化など、いろいろ手だては考えられているけれど、小学校の理科指導には、やはり物を見せる眼と、疑問を抱く心と、解

「このもの」  
 みのむし 酒々井小一  
 しもが ぶつても  
 おちなな ぶつても  
 はるが ぶつても  
 まだ ぶつても